運動・スポーツ場面における同一視と動機づけの関係

上地 広昭

Hiroaki Uechi: Relationship between Identification and motivation in exercise and sport. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 56: 215-228, June, 2011

Abstract : This study sought to develop the Exercise and Sport Identification Scale (ESIS) by examining the relationship between identification and motivation in exercise and sport. In a pilot study, items were collected from 70 university students to develop the scale. In Study 1, the participants were 139 university students. Factor analysis revealed that the ESIS consisted of 25 items and had a structure comprising three factors: (1) positive evaluation, (2) modeling, and (3) emotional bond. The scale showed both reliability and validity. In Study 2, the participants were 243 university students. ANOVA was conducted to determine the relationship between the experience of exercise and sport identification and motivation (five types of regulation: non-, external, introjected, identified, and intrinsic). The results of ANOVA revealed that the scores for non-, introjected, identified, and intrinsic regulation differed significantly between students in the experience group and those in the non-experience group. Students with experience had significantly higher scores for these four significantly different types of regulation than students without experience. Following ANOVA, the correlations between the scores for the factors of the ESIS and the type of regulation were examined in a group of 124 students. This revealed that all of the identification factors were significantly related to the scores for identified and intrinsic regulation among males. The results of this study suggest that identification is partly related to autonomous motivation in exercise and sport.

Key words : self determination theory, self regulation, admiration

キーワード : 自己決定理論, 自己調整, 憧れ

緒 言

定期的な運動やスポーツの実施により心身の健康上さまざまな恩恵が得られることは数多くの研究により報告されているが、わが国における運動習慣者（一回三十分以上の運動を週二回以上実施し、一年以上継続している者）の割合は、男性33.3%, 女性27.5%と決して高くはない（厚生労働省, 2008）。そのため、現在、「健康日本21」などの国家規模の健康増進事業が展開され、国民の運動・スポーツへの参加が促されている。

一般的に、運動・スポーツへの参加動機には、

「他者」の存在が大きく関わっている（たとえば、藏本・菊池, 2006）。特に、青少年期においては、他者への「憧れ（憧憬的要因）」が運動・スポーツへの参加動機づけとしての役割を果たしているという報告もある（谷嶋ほか, 1988）。子どもが、プロスポーツ選手に憧れ、自身の中に理想自己を形成し、その理想自己に近づくために、運動・スポーツへ参加する場合などがそれにあたる。さらに、この憧れは、運動・スポーツを継続する上での動機づけの保持にも影響を与えている可能性がある。

しかし、憧れが動機づけに果たす役割については、経験的には認識されているものの（加藤、

山口大学教育学部
〒753-8513 山口県山口市吉田1677-1
連絡先 上地広昭

Yamaguchi University, Faculty of Education
Yoshida 1677-1, Yamaguchi-shi, Yamaguchi 753-8513,
JAPAN
Corresponding author uechi@yamaguchi-u.ac.jp

1994), 動機づけ研究の文脈において実証的に検証された例は少ない。たとえば, Vallerand et al. (1992) は, 内発的動機づけの源泉として, 「知ること」「成し遂げること」「刺激を得ること」をあげているが, この「憧れ」は源泉として位置づけられておらず, 唯一, 湯川 (1974) が, Kagan (1958) の「同一視 (Identification)^{注釈1)}」に関する考えを参考に, 「憧れ」の概念を理想的他者への同一視という概念に変換し動機づけの理論に取り入れ, 同一視仮説として提唱している。

Kagan (1958) は, 同一視を単に人格の変数としてではなく, 学習の動機づけとしての役割を持ちうる概念として捉えた。彼は, 同一視が獲得・維持される過程として, 1) 自分が獲得したい特性をモデルが有していると認知する, 2) モデルを模倣することによりその特性が得られると考える, 3) モデルとの類似性を認知するたびにその傾向は強化される, 4) モデルと共通の感情体験を通してその傾向は維持される, という流れを想定した。湯川 (1974) は, この考えに基づき, 「同一視とは, ある個人がある特定の他者に対して抱く共感的な親和感情とそれに基づいた自発的模倣行動」と定義している^{注釈2)}。

運動・スポーツを扱ったものではないが, 湯川 (1981) は, 生徒の「教師への同一視」が学習に対する動機づけに及ぼす影響を検証するために, 女子大生104名を対象に自由記述形式の調査を行っている。その結果, 小学校から大学までの間に, 「影響を受けた教師がいる」と回答した学生 (75.0%) の半数が, 「その教師の担当している教科が好きになった, 興味を持つようになった」と答え, 約四分の一の学生が「当該教師の授業を通して, 教師という職業に憧れ, 教師になりたいと思うようになった」と回答していた。これらの調査結果は, 教師への憧れ (同一視) が, 学習への内発的動機づけを高める可能性を示唆したものである。

また, 湯川 (1992a) は, 女子大学生110名を対象に, 過去に遡って小学生時, 中学生時, および高校生時を回想させ, これまで授業を受けた教師に対する同一視傾向とその授業への学習意欲の

関係を検証し, 同一視傾向の強さが学習意欲ときわめて高い関連を示すことを明らかにしている。さらに, 湯川 (1992b) は, 家庭科教育に限った事例の報告ではあるものの, 小学校から高校までの間に, 教師に対する強い同一視傾向を示した者は, 大学入学後もその教科についての学習意欲が継続することを報告している。この結果は, 同一視が動機づけの始発 (きっかけ) だけではなく, 保持の側面にも影響を与える可能性を示唆している。

現在, 国内外を問わず, 運動・スポーツ場面における動機づけの研究は盛んに行われており, 参加動機, 達成動機, および目標志向性などについての理論も数多く存在する (伊藤, 2000)。磯貝 (2000) は, 従来の運動・スポーツに関わる多くの動機づけ理論を概観し, 動機理論志向 (達成動機理論, 内発的動機づけ理論など), 期待—価値理論志向 (期待—価値理論, 社会的認知理論など), および目標理論志向 (目標志向性に関する理論など) の3つのカテゴリーに大別している。動機理論志向に分類されている内発的動機づけ理論に関しては, 近年, Deci and Ryan (1985, 2000) の提唱する自己決定理論が非常に注目を集めており, その活用法や有効性について論じられている (西田, 2010)。自己決定理論は, Deci and Ryan (1985, 2000) が認知的評価理論や有機的統合理論を発展・統合させて導いた理論であり, 自律性, 有能感, 関係性への欲求を支援することが内発的動機づけを高めることを説明している。また, 従来, 一元的に捉えられていた外発的動機づけに関しても, 社会的価値の内在化の過程における自己決定 (自律性) の度合いにより, 外的調整 (価値を理解できず, 強制されている), 取り入りの調整 (価値を理解して, 義務的に行っている), 同一視的調整 (自分の価値観とし, 重要性を理解して行っている), 統合的調整 (他の価値観よりも優先させ, 行いたくて行っている, この調整は内発的調整と合わせて自律的動機づけと呼ばれる) の四つの自己調整スタイルに分類できることを提唱している。

理想的他者との同一視は, 他者の価値観 (社会

的価値観)を内在化させることと深く関わっている可能性があり、自律的な動機づけを促進するための重要な要因ではないかと考えられる。同一視の経験と動機づけの自己調整スタイルとの関連を実証的に示すことは自律的な動機づけを高めるための新たな方策の提案にも結びつき、その意義は大きいものと思われる。しかし、これまでに、運動・スポーツ場面における同一視についての詳細な検討はなされておらず、測定するための尺度も存在しない。そこで、本研究では、運動・スポーツ場面における理想的他者との同一視に関する尺度を開発すると同時に、同一視と動機づけの自己調整スタイルとの関係についても検証する。

予 備 調 査

1. 目的

運動・スポーツ場面における同一視の概念についてより具体的に把握するため、および運動・スポーツ同一視尺度の項目収集のために大学生を対象に予備調査を行った。

2. 方法

1) 調査対象

Y 県の国立大学に在籍する 2—4 年生合計 71 名を対象に質問紙調査を行った。質問紙の回収後、記入漏れや記入ミスのある回答を除外し、最終的に、70 名（平均年齢 19.8 歳；男子 32 名，女子 38 名；大学運動部・サークルへの加入率 68.6%；有

表 1 もっとも影響を受けた人物および具体的内容について

性格・人柄	頻度	影響を受けた人物に対する感情	頻度
厳しい（自分にも）	17	そのようになりたい（憧れ）	23
頼りになる	15	尊敬	7
熱意・闘志がある	12	その人に負けたくない	4
リーダーシップ（面倒見がよい）	12	カッコいい・きれい	4
信念を持っている（意志を貫く）	11	仲良くなりたい・深く関わりたい	3
優しい	10	その人に活躍してほしい	3
面白い・笑顔	5	認めさせたい	3
クール・無口・物静か	3	話してみたい	2
負けず嫌い	3	感謝	1
温厚	2	自分と重ねた	1
真面目	2	かけがえのない人	1
社交的	2	受けた影響の具体的内容	
気弱	1		頻度
わがまま	1	やる気になった（がんばろうと思った）	13
人を引きつける魅力がある	1	考え方が変わった（知識が深くなった）	8
		プレーを真似した	6
		同じスポーツを始めるきっかけになった	6
		プレーが上達した	5
		練習を取り入れた	4
		練習に取り組む姿勢	3
		スポーツが好きになった	3
		私生活（礼儀など）でも多くを学んだ	2
		道具を大切にするようになった	1
		同じ用具を使うようになった	1
		精神的に強くなった	1
能力・姿勢	頻度		
練習熱心，努力家	27		
高い運動能力（素晴らしいプレー）	21		
知識がある	6		
的確な指示	3		
楽しくプレーしている	3		
独自の考えを持っている	2		
諦めない	1		

効回答率98.6%)の回答を分析対象とした。

2) 調査期間

平成22年4月中旬に実施した。

3) 調査内容

まず、質問1において「これまでに、運動やスポーツを行う上で、何か強い影響を受けた人物はいますか」と同一視の対象(モデル)の有無を尋ね、その後、質問2において、下記の手続きで、同一視の内容について詳細に尋ねた。

Kagan(1958)および湯川(1974)の定義を見ると、同一視には、モデルが持つ特性を肯定的に評価する認知的側面、その特性に対し羨望し親近感を持つ感情的側面、モデルの行動を模倣しその特性を得ようとする行動的側面の3側面が存在することが分かる。そこで、質問2では、湯川の研究(1981)に倣い、認知的側面を「モデルの持つ特性(性格・人柄、能力・態度)」,感情的側面を「モデルに対する感情」,行動的側面を「影響を受けた内容」について自由記述形式で尋ねることにより明らかにした。

3. 結果および考察

これまでに、運動やスポーツを行う上で、強い影響を受けた人物がいるかどうかについて、70名中57名(82.6%)が「いる」と回答した。同一視(影響を受けた人物像および具体的内容)についての自由記述は、筆者が類似のものをまとめ表1にすべて示した。その人物の性格や人柄については、おもに「厳しい(自分にも)」「頼りになる」「熱意・闘志がある」「信念を持っている」など、厳格さ、頼もしさ、情熱に関する回答が多く、その能力・姿勢については「練習熱心、努力家」「高い運動能力」「知識がある」など努力や卓越した能力に関する回答が多くあげられていた。また、その人物に対しての感情については、「その人になりたい」、「尊敬」、「その人に負けたくない」「仲良になりたい」といった羨望、尊敬、親密感に関わる回答が多く、受けた影響の具体的内容は「やる気になった(がんばろうと思った)」「考え方が変わった(知識が深くなった)」、「プレーを真似した」「練習を取り入れた」など意欲・技

術の向上や模倣行動についてのものが多かった。

これらの回答は、研究Iにおける運動・スポーツ同一視尺度を開発する際の準備項目として役立てた。

研究 I

1. 目的

研究Iの目的は、運動・スポーツ同一視尺度を開発し、その信頼性および妥当性を検証することである。

2. 方法

1) 調査対象

Y県の国立大学に在籍する1—4年生合計243名を対象に質問紙調査を行った。ただし、質問紙の回収後、記入漏れや記入ミスのある回答、および「これまでに、運動やスポーツを行う上で、何か強い影響を受けた人物はいますか」という質問に「いない」と回答した者を除外し、最終的に、139名(男子102名、女子37名;平均年齢19.3歳、運動部・サークル加入率77.9%;有効回答率57.4%)の回答を分析対象とした。

2) 調査期間

平成22年5月上旬から下旬に実施した。

3) 調査内容

運動・スポーツ同一視尺度を作成するにあたり、本研究における予備調査、および湯川(1991)の作成した同一視尺度などを参考に項目を準備した。その際に、湯川(1991)の作成した同一視尺度の項目については運動・スポーツ場面に置き換え、類似の項目はできるだけ一つにまとめた(たとえば、「その人にはいつも試合で勝って欲しい」は、「その人をいつも応援している」にまとめた)。その結果、最終的に、30の運動・スポーツ場面における同一視に関する項目を選出した(認知的側面8項目、感情的側面18項目、行動的側面4項目)。回答形式は、「あてはまらない(1)」から「あてはまる(5)」の5件法を採用した。

4) 分析方法

運動・スポーツ同一視尺度の因子構造は、最尤法・プロマックス回転に基づく探索的因子分析によって検討を行った。本尺度の信頼性は、クロンバックの α 係数を算出することによる内的整合性、および再検査法（43名を対象に1週間間隔を空けた）による再現性を検討した。妥当性に関しては、項目内容を複数の専門家で検討することにより内容的妥当性を検証した。

3. 結果および考察

1) 運動・スポーツ場面における同一視の因子構造

運動・スポーツ場面における同一視に関する項目について、探索的因子分析を行った結果、スクリー基準や因子の解釈可能性の観点から、3因子解が最適であると判断されたため、因子負荷量が.40未満の項目および2重負荷のかかった項目を除き、3因子で再度同様の因子分析を行った。この結果、3因子25項目が、運動・スポーツ場面における同一視に関する項目として抽出された。抽出された因子とそれらに含まれる項目、因子負荷量、および共通性をまとめたものが表2であ

表2 運動・スポーツ同一視尺度の因子分析結果（因子負荷量、共通性、および α 係数）

項 目	因子負荷量			共通性
	I	II	III	
第Ⅰ因子：人物・能力の肯定的評価（ $\alpha=.87$ ）				
その人を尊敬している	.82	-.07	.03	.63
その人は、スポーツに対し非常に熱意がある	.82	-.06	-.02	.61
その人は運動能力が高く、いつも素晴らしいプレーをしている	.68	.02	-.01	.44
その人は、自分の信念を持ってスポーツに取り組んでいる	.67	-.11	.05	.40
その人に憧れている	.65	.02	.06	.64
その人は、練習熱心で、努力家である	.60	-.06	.10	.37
その人は、そのスポーツのいろいろな技術を身につけている	.57	-.05	-.08	.28
その人は頼りになる人である	.56	-.06	.13	.33
その人は独創的で誰にも真似できないプレーをしている	.54	.07	-.11	.30
第Ⅱ因子：模倣欲求・行動（ $\alpha=.88$ ）				
その人に似ているとうれしい	-.03	.84	-.01	.68
その人のようになりたい	.14	.82	-.05	.77
その人の考え方に似てきた	-.27	.69	.12	.43
その人とどこか似ているところがあればいいと思う	.05	.63	.10	.51
その人を理想としている	.29	.63	-.07	.62
その人のプレーだけではなく、ライフスタイルも参考にしている	-.27	.61	.13	.35
その人のプレースタイルをよく真似している	.03	.50	.05	.30
その人のように上手になれたらと思う	.38	.45	.04	.56
その人を手本にしている	.14	.43	-.03	.25
その人のしていることで、あんなことができたと思うことが多い	.32	.41	-.11	.35
第Ⅲ因子：情緒的結合（ $\alpha=.86$ ）				
その人と仲良くなりたい	.09	-.06	.91	.84
その人とできるだけ交流を持ちたい	.15	-.09	.89	.81
その人からも好かれたい	.01	.08	.81	.73
その人がうれしそうにしていると、自分までうれしくなる	.06	.02	.42	.34
その人の調子が悪いと自分まで元気がなくなるように感じる	-.14	.08	.41	.18
その人と気持ちが通じていると思っている	-.29	.32	.41	.31

る。第Ⅰ因子には、合計9項目が含まれ、その内容は、「その人を尊敬している」、「その人は、スポーツに対し非常に熱意がある」「その人は運動能力が高く、いつも素晴らしいプレーをしている」などモデルの人物や能力に対する肯定的な評価を示す項目群であった。したがって、第Ⅰ因子は「人物・能力の肯定的評価」に関する因子であると考えることができる。同様に第Ⅱ因子には、合計10項目が含まれ、その内容は「その人に似ているとうれしい」、「その人のようになりたい」といった、モデルとの類似性の欲求や自発的な模倣行動を表す項目群であった。したがって、第Ⅱ因子は、「模倣欲求・行動」と命名した。第Ⅲ因子には、「その人と仲良くなりしたい」、「その人とできるだけ交流を持ちたい」などモデルに対する強い親和欲求を示す6つの項目であり「情緒的結合」と命名した。以上、探索的因子分析の結果から、運動・スポーツ同一視尺度は、モデルの能力に対する肯定的評価に関する9つの項目、モデルへの模倣欲求・行動に関する10の項目、およびモデルとの情緒的結合に関する6つの項目により構成されることが明らかになった。

本尺度を作成するに当たって、予備調査の段階では、運動・スポーツ場面における同一視を認知、感情、行動の三側面から捉えたが、本尺度の第Ⅰ因子「人物・能力の肯定的評価」は認知—感情的側面、第Ⅱ因子「模倣欲求・行動」は感情—行動的側面、第Ⅲ因子「情緒的結合」は感情的側面を表す項目により形成された。当然ながら、ひとの認知、感情、および行動の三者は密接に関連しているため、このように各側面の項目が相互に交じり合った結果も十分に起こりうるものである。

各因子間の関係については、表3にも示して

ある通り、相互に関連を持っている ($r = .31 - .52$)。三者間の因果関係としては、始発として、ひとがモデルに対する肯定的評価(第Ⅰ因子)を行い、それに伴い模倣欲求・行動(第Ⅱ因子)やモデルとの情緒的結合(第Ⅲ因子)が生起するという流れが想定できる。しかし、これらは一方向的な関係ではなく、モデルとの情緒的結合を強めることや、自発的な模倣行動を繰り返すことが、さらにモデルの能力を肯定的に認知させるといった三者の互恵的双方方向性をもって働いている可能性が高い。これらについては、今後、その因果関係を詳細に、別途検証する必要がある。

2) 運動・スポーツ同一視尺度の信頼性および妥当性の検証

運動・スポーツ同一視尺度の各因子の内部一貫性を検討するためにクロンバックの α 係数を求めた。その結果、各因子の α 係数は、「人物・能力の肯定的評価」因子が.87、「模倣欲求・行動」因子が.88、「情緒的結合」因子が.86であり、十分な内部一貫性が認められた。また、43名(男子30名、女子13名)を対象に、1週間の間隔をあけた再検査法の結果は、第Ⅰ因子 $r = .61$ 、第Ⅱ因子 $r = .74$ 、第Ⅲ因子 $r = .83$ であり再現性が認められた。妥当性については、運動・スポーツ同一視尺度に含まれる項目について体育学および心理学を専攻する大学教員および大学院生4名で精査した結果、これらの項目は運動・スポーツ場面における同一視として内容的に妥当であると判断した。

信頼性および妥当性の検証について今後異なる手法でのさらなる検証が必要ではあるが、上記の結果を受けて一応の信頼性および妥当性が確認されたものと判断する。

研究Ⅱ 同一視と動機づけの自己調整スタイルの関係

1. 目的

研究Ⅱでは、運動・スポーツ場面における同一視と動機づけの自己調整スタイルの関係について検討することを目的とした。

表3 運動・スポーツ同一視尺度の因子間の相関

	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子
第Ⅰ因子		.52***	.31***
第Ⅱ因子			.50***
第Ⅲ因子			

*** $p < .001$

2. 方法

1) 調査対象

研究Ⅱは、研究Ⅰと同時に同一の大学1—4年生243名を対象に行った。

2) 調査内容

(1) 影響を受けた人物および時期

同一視に関する基本的な情報として、質問1「これまでに、運動やスポーツを行う上で、何か強い影響を受けた人物はいますか」、質問2「影響を受けた時期はいつですか（小学校入学以前、小学校、中学校、高等学校、大学入学後；複数回答可）」、質問3「影響を受けた人物は（プロスポーツ選手・トップアスリート、先輩、先生・コーチ、友達、漫画やテレビの架空の人物など；複数回答可）」、質問4「その人（その人たち）からの影響は今でも残っていますか」を尋ねた。

(2) 運動・スポーツ場面における同一視

運動・スポーツ場面における同一視の程度を測定する尺度として、著者が研究Ⅰで作成した「人物・能力の肯定的評価」因子、「模倣欲求・行動」因子、および「情緒的結合」因子から構成される運動・スポーツ同一視尺度を用いた。

(3) 運動・スポーツ場面における動機づけの自己調整スタイル

運動・スポーツ場面における動機づけに関しては、松本ほか（2003）の作成した運動動機づけ尺度を使用した。本尺度は、自己決定理論に基づき、自己調整スタイルごとに、「外的調整」、「取り入りの調整」、「同一視的調整（統合的調整を含む）」、「内発的調整」、および「非動機づけ（目的意識がなく、行動が全く自己決定されていない状態）」の5つの因子に分かれている。

3) 分析方法

研究Ⅱでは、まず、これまでに、運動・スポーツを行う上で影響を受けた人物、および影響を受けた時期に関しての記述統計を行った。次に、同一視の性差について検討するために、 χ^2 検定を用いて同一視の「経験」についての男女比較を行った（本研究では、質問1「これまでに、運動やスポーツを行う上で、何か強い影響を受けた人物はいますか」について「いる」と回答した者

（139名）を「同一視経験あり」、「いない」と回答した者（104名）を「同一視経験なし」と捉えた^{注釈3)}）。さらに、運動・スポーツの同一視経験のある者を対象に、運動・スポーツ同一視尺度の各因子合成点についてt検定を用いて男女の比較を行った。

また、同一視の「経験」と、現在の運動動機づけの自己調整スタイルの関係について検証するために、性および同一視の経験の有無を独立変数、運動動機づけ尺度の各因子を従属変数とする二元配置の分散分析を行った。ただし、同一視経験のある者（139名）でも質問4「その人（その人たち）からの影響は今でも残っていますか」の質問に「残っていない」と回答した者（13名）は除外した。

最後に、同一視の「強さ」と動機づけの自己調整スタイルの関係について検証するに当たり、上記と同様の者（同一視欲求を現在でも有している126名）を分析対象とし、運動・スポーツ同一視尺度および運動動機づけ尺度の因子合成点について男女別に相関分析を行った。

3. 結果および考察

1) 影響を受けた人物および時期について

これまでに、運動やスポーツを行う上で、強い影響を受けた人物がいるかどうかについて、243名中139名（57.2%）が「いる」と回答し、影響を受けた時期については、小学校入学以前9名（6.5%）、小学校時56名（40.3%）、中学校時65名（46.8%）、高校時48名（34.5%）、大学入学後10名（7.2%）であった。また、影響を受けた人物については、「プロスポーツ選手・トップアスリート」が70名（50.4%）、「先輩」が35名（25.2%）、「先生・コーチ」が30名（21.6%）、「友達」が25名（18.0%）、「漫画やテレビの架空の人物」が15名（10.8%）、「兄弟」が12名（8.6%）、「両親」が12名（8.6%）、「その他（有名人、後輩など）」が13名（9.4%）であった。この結果から、六割近くの学生が他者からなんらかの影響を受けており、特に、小学校時、中学校時、および高校時に影響を受けている者が多いことが見て取れる。本

研究の予備調査に比べて、他者から影響を受けた者の割合がやや減少している理由としては、予備調査では、教育学部（保健体育撰修や健康・スポーツコースなどが含まれる）の学生だけを対象としていたのに対し、研究Ⅱでは、教育学部に加え、工学部や経済学部在籍する学生も対象に含めたことが原因と思われる。影響を受けた人物については、プロスポーツ選手・トップアスリート、先輩、および先生・コーチなど、自分よりも年長の存在が大勢を占めた。

表4 男女別の運動・スポーツ同一視尺度得点の平均値および標準偏差

	男子 (102名)	女子 (37名)	t 値
人物・能力の肯定的評価	39.30 (5.91)	39.39 (4.57)	-.08
模倣欲求・行動	33.33 (7.94)	35.00 (7.96)	-1.10
情緒的結合	18.50 (5.60)	22.95 (3.84)	-4.46***

() 内は標準偏差

*** $p < .001$

2) 同一視の性差について

同一視の経験率の性差について χ^2 検定により検討した結果、男子59.0% (102名)、女子52.9% (37名) と、男子がわずかに高い経験率を示したが、統計的に有意な差は認められなかった ($\chi^2(1) = .08, p > .05$)。運動・スポーツ同一視尺度の各因子合成点について t 検定の結果は、「人物・能力の肯定的認知」因子および「模倣欲求・行動」因子の得点については有意な性差は認められなかったが、「情緒的結合」因子について有意な性差が認められた (表4 参照)。これらの結果から、女子は、男子に比べ、同一視の経験率についての差はないものの、同一視の内容について理想的他者に対しより強い情緒的結合を示すことが明らかになった。

3) 同一視の「経験」と動機づけの自己調整スタイルの関係について

運動・スポーツ場面における同一視経験の有無によって、現在の動機づけの自己調整スタイルに差異がみられるかどうかを検討するために分散分析を行った結果、運動動機づけ尺度の下位因子である「内発的調整」、「同一視的調整」、「取り入れ

表5 性別および同一視の経験別の運動動機づけ尺度得点の平均値および標準偏差

		同一視の経験		性の主効果	同一視経験の主効果	交互作用
		経験あり	経験なし	F	F	F
動機づけの自己調整スタイル	内発的	男子	16.64 (.34)	.02	25.21***	1.31
		女子	16.17 (.56)			
	同一視的	男子	16.71 (.31)	3.30†	18.16***	1.05
		女子	17.06 (.52)			
	取り入れ的	男子	10.32 (.41)	1.61	5.73*	2.24
		女子	10.45 (.68)			
	外的	男子	6.59 (.28)	.49	.11	.01
		女子	6.82 (.46)			
	非動機	男子	5.34 (.27)	6.93**	5.28*	2.71
		女子	4.97 (.44)			

男子同一視経験あり92名、男子同一視経験なし71名、女子同一視経験あり34名、女子同一視経験なし33名

() 内は標準偏差

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表6 運動・スポーツ場面における同一視と動機づけの自己調整スタイルの相関関係

			動機づけの自己調整スタイル				
			内発的調整	同一視的調整	取り入れの調整	外的調整	非動機
同一視	男子	人物・能力の肯定的評価	.32**	.42***	-.13	-.09	-.26***
		模倣欲求・行動	.31**	.31**	.05	-.09	-.11
		情緒的結合	.34**	.42***	.19†	.20†	-.13
	女子	人物・能力の肯定的評価	-.02	.07	-.10	.01	-.35*
		模倣欲求・行動	.24	.34†	.08	.12	-.25
		情緒的結合	.10	.30†	-.09	-.14	-.37*

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

的調整」, および「非動機づけ」について有意な「同一視経験」の主効果が認められた(表5参照). また, 「非動機づけ」については, 有意な性差も認められた. この結果は, 運動・スポーツ場面において, 何らかの強い影響を与える他者と出会う, もしくはそのような他者の存在を認知することにより, 運動・スポーツの社会的価値観が自律的に内在化する可能性を示唆している.

4) 同一視の「強さ」と動機づけの自己調整スタイルの関係について

ここでは, 運動・スポーツを行う上で強い影響を受けた人物がいる(同一視の経験がある)と回答した者のみを対象に, その同一視の強さと動機づけの自己調整スタイルとの関係について相関分析を用いて男女別に検討を行った. その結果をまとめたものが表6である.

男子においては, 運動・スポーツ同一視尺度のすべての下位因子(人物・能力の肯定的評価, 模倣欲求・行動, 情緒的結合)が, 動機づけの内発的調整および同一視的調整と関連を示した($r = .31-.42$). また, 人物・能力の肯定的評価は, 非動機づけとの間に負の相関を示すことが明らかになった($r = -.26$). これは, モデルの特性を高く評価し, それに憧れ, 模倣し, 情緒的に結合を感じている者ほど, 運動・スポーツを行うことの価値を自己決定的に内在化させていることを示している. さらに, モデルの能力を高く認知し, 強く憧れることが, 少なからず運動・スポーツへの参加へ興味を向けさせる(非動機づけから

脱せさせる)可能性も示唆している.

女子については, 同一視尺度の模倣欲求・行動および情緒的結合において, 動機づけの同一視的調整との間で中程度の相関係数がみられる($r = .30-.34$)が, 有意確率は10%水準であった. 有意な確率(5%未満)が得られなかった理由として, 同一視経験のある女子のサンプル数の少なさ(34名)があるのではないと思われる. しかしながら, 女子においても同一視における人物・能力の肯定的評価や情緒的結合が非動機づけと負の関連が示されたことから, 自分が憧れ, 尊敬するモデルを見つけ, そのモデルと自分を情緒的に重ね合わせるような体験を持つことが, 運動・スポーツへの自律的な動機づけを生起させることにつながる可能性が示されている.

総 合 論 議

同一視の対象(モデル)として, もっとも多くあげられていたのは, 「プロスポーツ選手・トップアスリート」であり, 回答の半数を占めていた. やはり, 研究Ⅱにおける運動・スポーツ同一視尺度の第Ⅰ因子「人物・能力の肯定的評価」の項目にも抽出されているように, 高い運動能力(優れた競技力など)を有することが, モデルとなる大きな条件の一つであることは間違いないようである. しかし, 身近な「先輩」や「先生・コーチ」をモデルとしている者も多数おり(それぞれ, 25%, 22%), モデルとして位置づけられるため

に、必ずしも、プロスポーツ選手並みの運動能力を有する必要はないことも伺える。同一視尺度の第Ⅰ因子の項目を見ても、高い運動能力だけではなく、スポーツに対する熱意や信念、ひたむきな努力や練習姿勢なども、モデルとなる大きな要因となっている。

運動やスポーツを行う上で、強い影響を受けた時期については、小学生時から増加し、中学生時をピークとして、高校生時へと続いている。運動やスポーツに限らず、これらの時期が他者の影響を受けやすい多感な時期であることは容易に想像できる。大学時における割合が少ないが、これについては本研究の主な対象者が大学1,2年生であったため、まだ大学生活が短く、モデルを見つけるまでの時間に問題があったのかもしれない。また、高校以前と比較すると、大学時の運動部やスポーツクラブへの加入率は低いことが予想され、運動・スポーツに触れる機会自体が減ってしまうことも、この一因かもしれない。

同一視の性差についてであるが、同一視の経験率に性差はみられなかったが、同一視の内容については有意な性差が認められた。女子は男子に比べ、同一視の際にモデルへの情緒的結合が強く喚起されることが示された。この原因として、もともとの親和欲求の性差、およびモデルの性別の二点から解釈できるのではないかと考えられる。まず、女子は男子に比べて、平時より親和欲求が強い（たとえば、榎本，2000）。そのため、この親和欲求の性差がそのまま同一視場面における情緒的結合の差異に反映されるのではないかと考えられる。もう一点、モデルの性別についてであるが、これについては本研究ではモデルの性別を問わなかったため、あくまで推論になるが、モデルが同性なのか異性なのかにより同一視における情緒的結合の強さは異なる可能性が高く、異性に対するほうが「仲良くなりたい」「好かれたい」といった情緒的結合が強く喚起されるのではないだろうか。つまり、男性は、女性に比べ運動・スポーツ場面により多く参加しているため（たとえばプロスポーツ選手や指導者の数など）、相対的に女子は異性を同一視の対象とする割合が高くな

り、これにより情緒的結合の性差が生じている可能性が指摘できる。

運動・スポーツ場面における同一視と動機づけの自己調整スタイルとの関係については、主に思春期（小学・中学・高校時）に同一視の経験を持つことが、大学生時の自律的な運動・スポーツ参加につながることが示された。さらに、モデルとの同一視の傾向が強いほど、運動・スポーツ参加への自律性が高い（運動・スポーツの価値の自己決定的な内在化が進んでいる）ことも明らかになった。小学生、中学生、および高校時の経験が、大学生時における運動・スポーツへの動機づけの自己調整スタイルにまで影響を与えることは非常に興味深く、年少時における同一視経験が生涯を通じた運動・スポーツ参加に果たす役割の重要性を示唆しているともいえる。

以上、本研究で明らかになった結果について論じたが、以下では、本研究の結果を踏まえつつ、動機づけ研究の文脈における同一視の独自性、および同一視の喚起を支援する方略について論じる。まず、同一視の独自性についてであるが、これについては自己決定理論の中の主要概念と比較しながら論じる。自己決定理論では、内発的動機づけを高め、社会的価値を自己決定的に内在化させるためには、自律性、有能感、および関係性への欲求を満たすことが重要であると提唱されている。本研究で扱った同一視も内発的動機づけや価値の内在化と関連することが示され、中でも「同一視の調整（本研究では統合的調整も含む自律性の高い自己調整スタイル）」と強く関連していることが明らかにされた。Ryan and Connell (1989)の研究では、関係性への欲求が同一視的調整と関連を持つことを報告しており、重要な他者との関係性が社会的価値の内在化の過程に影響することを示唆している。このことから考えると、同一視は、関係性への欲求の一部（関係性への欲求に内包される概念）として位置づけることができるようにも思える。たしかに、同一視も関係性への欲求も他者との関係の中で生起するという点では同様ののだが、関係性への欲求がMaslow (1943)の欲求階層理論における安全欲求や

親和欲求に相当するのに対し、同一視は自身の可能性を最大限に発揮し理想自己へ近づくためのより高次の自己実現欲求に近い概念であるという点で両者は異なる。つまり、同一視と関係性への欲求とでは欲求の次元が異なる可能性が指摘できる。

また、自己決定理論の中であげられている3つの欲求は、動機づけの始発というよりも、むしろ動機づけの保持の側面を扱っている(長沼, 2004)のに対し、理想的他者に対する同一視は、先行研究(湯川, 1981, 1992b)からも動機づけの始発と保持の両側面に機能する可能性が示されており、本研究の予備調査における「受けた影響の具体的内容」を概観しても、保持だけではなく始発に関わる記述が含まれていた(たとえば、「同じスポーツを始めるきっかけになった」など)。同一視は動機づけの過程全般に関わる極めて多機能的な概念であり、運動・スポーツを継続させるだけではなく、参加のきっかけとしても機能する可能性を有している。

次に、同一視の喚起を支援する方略について思索する。基本的には、同一視はあくまでも能動的、自然発生的、偶発的なもので、同一視の対象の決定には、個人の特性、環境、発達段階などが複雑に絡んでいると思われるため、他者の同一視をコントロールすることは困難であろう。しかし、それを踏まえながらも、ここでは、あえて同一視の喚起を支援する方略について、社会および個人の両レベルから考えてみる。まず、社会全体から見た場合、メディアが特定のスポーツ選手を大々的に取り上げることにより「偶像(ヒーロー)」を作り上げ、人々の同一視を意図的に誘導することは日常的に行われている。おそらく同一視のモデルは発達段階や興味などによって変化していくため、このようなメディア誘導による同一視は一過性のものでしかないかもしれないが、まず同一視を喚起させ、それをきっかけとして、その後の運動・スポーツ参加につなげるというのであれば、このようなメディアの働きかけも有益なものであるといえる。

ただし、この際に、メディアが注意しなければならないのは、適切な運動・スポーツの価値づけ

を行わねばならないということである。特に青少年に向けて発信する場合、彼らが運動・スポーツの向社会的な価値のみに反応するとは限らない。たとえば、米国の身体活動促進キャンペーン「VERB」においては、青少年に対し運動・スポーツを「COOL (かっこいい, おしゃれ)」と価値づけるような様々な仕掛けを行い運動・スポーツへの参加を促しているが、キャンペーン開始時(初年度)は学校での展開を行っていない(ただし、次年度からは行っている)。その理由として、青少年が「学校はCOOL ではない」と捉えており、子どもが向社会的なもの(規則を重視する学校的なもの)を必ずしも「かっこいい」「おしゃれ」とは思わず、それらに動機づけられない可能性があると考えたためである(Asbury, et al., 2008)。

だからといって、このような青少年の嗜好に迎合しすぎることは早計である。どれほどプレーが優れていても、反社会的な(もしくは非社会的な)スポーツ選手への同一視を喚起させるような情報を発信することは自重すべきであり、そのようなモデルへの憧れは、「勝利至上主義」や「勝てば官軍」といった不適切な運動・スポーツの価値を子どもに内在化させることにもつながり、長期的視点に立てば、運動・スポーツ界にとっても大きな損失となる。目指すべきは、反社会的(もしくは非社会的)ではなく、なお且つ「かっこいい」「おしゃれ」と思わせる適切な運動・スポーツの価値づくりであり、これについてはメディアに限らず、学校、家庭、および地域による社会全体からの働きかけが必要である。

同一視の喚起を支援するための個人レベルでの行いとしては、集団内における年長者が年少者に対し範となる自覚を持つことではないかと考える。本研究の結果からも、同一視の対象は自分より年長者から選ばれることが多いことが示されており、集団における年長者は、高い運動能力を見せるだけではなく、むしろ、年少者に対しひたむきな努力や真摯な姿勢を見せることが重要なのではないだろうか。そのためには、まず自分自身が運動・スポーツの価値を自己決定的に内在化さ

せ、自律的に取り組む必要がある。おそらく、運動・スポーツの価値が内在化されていない者に対して、同一視を喚起する（憧れを抱く）者はいないだろう。先述の通り、同一視のモデルは意識的になろうとしてなれるものではなく、他人の同一視を意図的に誘導することは難しいかもしれないが、集団内における年長者の一人ひとりが「自分が同一視のモデルになるかもしれない」という自覚を持つことが重要なのではないだろうか。年長者が範となるのは、運動やスポーツ場面に限った話ではなく、親子関係や教師と生徒の関係においても当てはまることであり、これは年長者が年少者に対し果たすべき社会的責任であるともいえる。

今後の展望

本分野における今後の研究課題をまとめる。まず、今後、運動・スポーツ場面の同一視についての発達の変化について検証する必要がある。本研究では、同一視の「経験時期」および同一視の「対象（モデル）」について複数回答を認めていたため、正確なデータ集計を行うことができなかったが、誰をモデルとするかについては、本人の特性に加えて、同一視を経験する時期（発達段階）も大きく関わっている可能性が考えられる（たとえば、小学生のうちはプロスポーツ選手やマンガの登場人物に憧れ、中・高校生になると先生や先輩など身近な存在に憧れるなど）。また、個人内においても、時期によってモデルが移り変わる可能性があり、時期ごとにモデルを変えながらも常に同一視を経験し続けるといったケースも十分に起こりうるものと思われる。

次に、同一視が影響を及ぼす範囲についての問題である。運動・スポーツ場面における同一視が、種目ごとに特異的に影響するのか、もしくは他種目に般化し影響するのか（たとえば、野球選手に対する同一視がサッカーなど他のスポーツ種目への動機づけの自己調整スタイルに影響を与えるのか）、般化するのであればどの程度の範囲まで般化するのか（たとえば、野球選手に対する同一視がスポーツに対する動機づけの自己調整スタ

イルだけではなく、学業や労働など他領域の動機づけの自己調整スタイルにも影響を与えるのか）についても検証が必要である。

最後に、研究手続き上の限界であるが、本研究の対象者は一地方の国立大学の学生であり、サンプル数も決して十分なものとはいえなかった。そのため、今後データの収集範囲を拡大し、対象者数を増やしてさらなる検証を行うことが求められる。

ま と め

本研究で明らかになったことを簡潔にまとめる。
(1)運動・スポーツ場面における同一視の構成概念として、モデルに対し肯定的な評価を行う、模倣の欲求や行動が生じる、モデルとの情緒的な結合を求める、の三つの要素があげられた。(2)同一視のモデルは、プロスポーツ選手・トップアスリート、先輩、先生・コーチなど自分より年長者が多く、対象となる要件には、高い競技能力だけではなく、運動・スポーツに対する信念や真摯な姿勢も含まれている可能性が高い。(3)同一視を経験した時期については、中学生時が最も多く、ほとんどの対象者において大学生時までその影響が残っていた(139人中126人)。(4)女子は、男子に比べて同一視のモデルへの情緒的結合が強い。(5)男女ともに、同一視経験のある者は、運動・スポーツを行うことの価値を自分の中に内在化させていた。(6)さらに、同一視経験のある男子においては、同一視の傾向が強い者ほど、より運動・スポーツの価値の内在化が進んでいた(自律的に運動・スポーツに取り組んでいた)。

注釈

- 1) 元来、「同一視」は、精神分析における概念であるが、柏木(1966)がすでに指摘しているように、現在では、同一視の概念は、必ずしもFreud(1920)の唱えた同一視の概念とは一致しておらず、本研究では、エディプスコンプレックス、リビドー、および無意識といった精神分析的文脈から切り離して本用語を用いている。
- 2) 同一視理論と類似の理論として、Bandura(1969)

が提唱するモデリング理論があるが、モデリング理論が外的な強化経験が内化される過程を説明しているのに対し、Kagan (1958) の同一視理論では自己模倣など自己が行う行動の結果そのものが強化になるような主観的、内的強化を重視している点で異なる(湯川, 1974)。むしろ、理想的他者への同一視は、理想自己の形成に影響を与えうる要因であり、動機づけの源泉として現実自己と理想自己の乖離の克服を想定した Higgins (1987) の自己不一致理論との類似性のほうが高いと思われる。

- 3) 研究Ⅱでは、「これまでに、運動やスポーツを行う上で、何か強い影響を受けた人物がいる」ことを「同一視の経験」として捉えている。「何か強い影響を受ける」ことが必ずしも同一視経験というわけではないが、予備調査における「影響を受けた人物(モデル)の持つ特性(性格・人柄、能力・態度)」、「モデルに対する感情」、「影響を受けた内容」の自由記述をみるとその多くが同一視の過程に関連して生起しているものであることがわかる。湯川 (1992a) の研究においても、教師への同一視経験の有無について「今までに、一番好きで尊敬し、何か影響を受けた教師がいるか」という形で尋ねている。そのため、ここでは、便宜的にはあるが、「何か強い影響を受けた人物の有無」を「同一視経験の有無」とみなして研究を進めている。

文 献

- Asbury, L.D., Wong, F.L., Price, S.M., and Nolin, M.J. (2008) The VERB™ Campaign: Applying a Branding Strategy in Public Health Original Research Article. *Am. J. Pre. Med.*, 34(6): S183-S187.
- Bandura, A. (1969) Social learning theory of identificatory processes. Goslin, D.A. (ed.) *Handbook of socialization theory and research*. Rand McNally: New York, pp. 213-262.
- Deci, E.L. and Ryan, R.M. (1985) *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. Plenum Press: New York.
- Deci, E.L. and Ryan, R.M. (2000). The “what” and “why” of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychol. Inq.*, 11(4): 227-268.
- 榎本淳子 (2000) 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連. *教育心理学研究*, 48(4): 444-453.
- Freud, S. (1920) *A general introduction to psychoanalysis*. Liveright: New York.
- Higgins, E.T. (1987) Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psych. Rev.*, 94(3): 319-340.
- 磯貝浩久 (2000) 運動行動に対する動機づけ理論とその文化規定. *健康支援*, 1(2): 15-26.
- 伊藤豊彦 (2000) 動機づけ研究の課題. *スポーツ心理学研究*, 27(1): 73-82.
- Kagan, J. (1958) The concept of identification. *Psych. Rev.*, 65(5): 296-305.
- 柏木恵子 (1966) 同一視に関する最近の研究. *教育心理学研究*, 14(4): 230-245.
- 加藤 久 (1994) *少年サッカーの指導* (改定初版). 雪書房: 新潟.
- 藏本健太・菊池秀夫 (2006) 大学生の組織スポーツへの参加動機に関する研究: 体育会運動部とスポーツサークル活動参加者の比較. *中京大学体育学叢義*, 47(1): 37-48.
- 厚生労働省 (2008) 平成20年国民健康・栄養調査結果の概要. pp. 11.
- Maslow, A. (1943) A theory of human motivation. *Psych. Rev.*, 50(4): 370-396.
- 松本裕史・竹中晃二・高家望 (2003) 自己決定理論に基づく運動継続のための動機づけ尺度の開発—信頼性および妥当性の検討. *健康支援*, 5(2): 120-129.
- 長沼君主 (2004) 2章 自律性と関係性からみた内発的動機づけ研究. 上淵寿編 *動機づけ研究の最新線*. 北大路書房: 京都, pp. 30-60.
- 西田保 (2010) 内発的動機づけ, 外発的動機づけの再考: 自己決定理論をめぐって. *スポーツ心理学研究*, 37(1): 45-47.
- Ryan, R. M. and Connell, J. P. (1989) Perceived locus of causality and internalization: Examining reasons for acting in two domains. *JSPS*, 57(5): 749-761.
- 谷嶋喜代志・長田一臣・福田将史・斎藤 朗・崔二準・楠本恭久 (1988) 体育専攻学生のスポーツ参加の動機に関する研究. *スポーツ心理学研究*, 15(1): 78-85.
- 湯川隆子 (1974) 学習の動機づけ要因としての同一視: I: 選択行動に及ぼすモデルの効果. *教育心理学研究*, 22(1): 11-20.
- 湯川隆子 (1981) 学習の動機づけ要因としての同一視: 大学生女子における回想的自由記述の分析から. *名古屋女子大学紀要*, 27: 159-170.
- 湯川隆子 (1991) 中学生の家庭科学学習への動機づけ要因としての家庭科教師への同一視. *日本家庭科教育学会誌*, 34(2): 1-7.
- 湯川隆子 (1992a) 大学生における家庭科への動機づけ (第1報): 過去の学校生活における家庭科教師への

同一視経験. 日本家庭科教育学会誌, 35(3): 79-85.

湯川隆子 (1992b) 大学生における家庭科への動機づけ
(第2報): 家庭科学習に及ぼす過去の家庭科教師への
同一視の影響一視経験. 日本家庭科教育学会誌,
35(3): 87-92.

Vallerand, R.J., Pelletier, L.G., Blais, M.R., Briere,
N.M., Senecal, C.B., and Vallieres, E.F. (1992) The
academic motivation scale: A measure of intrinsic, ex-

trinsic, and amotivation in education. *Educ. Psychol.*
Meas., 52(4): 1003-1017.

(平成22年7月9日受付)
(平成22年11月24日受理)

Advance Publication by J-STAGE
Published online 2011/1/15